名人を訪ね、「聞き書き」する
高校生を受け入れてみませんか？

第25回 聞き書き甲子園

協力市町村（地域）公募のご案内

【主催】聞き書き甲子園実行委員会
（農林水産省、文部科学省、環境省、公益社団法人国土緑化推進機構、
NPO 法人共存の森ネットワーク、NPO 法人地球緑化センター）

人と自然、人と人、世代と世代をつなぐ

「聞き書き甲子園」は、高校生が農山漁村に暮らす「名人」を訪ね、その知恵や技術、生きざまを「聞き書き」し、発信する活動です。

「名人」は、林業、炭焼き、木工職人、漁師など、自然と向き合い、地域の暮らし、文化、伝統を守りながら仕事を続けてきた方たち。その多くは、高校生の祖父母にあたる世代です。一方、高校生は、北海道から沖縄まで全国から参加します。

高校生は一対一で、各地域の「名人」を訪ね、インタビューし、その言葉を一言一句、書き起こして作品をまとめます。

「名人」の「聞き書き」を通して、高校生は「働くこと」や「生きること」を学びます。まるで本当の祖父母と孫のように「名人」との交流がつづく高校生がいます。大学生や社会人となって、農山漁村にI・Uターンし活躍する卒業生もいます。皆さまの地域でも、「名人」を推薦し、「聞き書き」する高校生を受け入れてみませんか。

「聞き書き甲子園」では、毎年、同事業にご協力いただく市町村（地域）を公募し、開催しています。

「自然と向き合う仕事の大切さ」や「地域ごとに特色ある生活文化の豊かさ」を広め、未来を担う次世代を育成するとともに、ご協力いただいた地域には、長年にわたり育まれてきた「なりわい」や「生活文化」を再認識し、地域の未来を共に考える「場」を提供できればと考えています。同事業の趣旨にご賛同いただき、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

聞き書き甲子園　協力市町村（地域）

公募概要

公募対象

市町村（地域）

- ☐ 令和８年度「第 25 回聞き書き甲子園」において、高校生の「聞き書き」の対象となる「名人」（※１）を原則として６～８名ご推薦いただくことが要件となります。（※ 2）
- ☐ 市町村を窓口として「地域団体」（※ 3）が実質的な主体として申請することや、複数の市町村が連名で申請することもできます。
- ☐ 選定された「名人」には、令和８年８月下旬以降に、高校生の「聞き書き」取材にご協力いただきます。「聞き書き」する高校生の旅費等は、主催者（聞き書き甲子園実行委員会）が負担します。
- ☐ 市町村のご担当者には、研修会・フォーラムへのご参加や高校生の受入れ等について、ご協力をお願いいたします。

※１
「名人」は、林業、水産業、工芸など、森・川・海など地域の自然とかかわる仕事に長年従事し、先人からの知恵や技、心を受け継いできた概ね 60 歳以上の方を想定しています。

※２
推薦名人の人数についてはご相談いただけます。

※３
ここでいう地域団体とは、地域自治組織や市民活動団体、事業協同組合等をさします。

公募期間

令和７年５月９日（金）～９月４日（木）17 時必着

公募要領

「協力市町村（地域）公募要領」に定める申請書（様式１）及び申請地域概要説明書（様式２）を聞き書き甲子園事務局宛に郵送又はメールに添付し提出してください。
詳しくは下記 URL より公募要領をご確認ください。

聞き書き甲子園［市町村（地域）の方へ］　https://www.kikigaki.net/join/

選定結果

令和７年 10 月末までに文書により通知します。

名人の推薦

選定された市町村（地域）には、令和８年１月末までに「名人」を推薦いただきます。
※上記サイトに「名人推薦要領」を掲載しています。あわせてご確認ください。

応募先・お問い合わせ

〒 156-0043　東京都世田谷区松原１－ 11 － 26 － 301 NPO 法人共存の森ネットワーク内
聞き書き甲子園実行委員会事務局
TEL：03-6432-6580　FAX：03-6432-6590　E-mail：contact@kikigaki.net

第25回

聞き書き甲子園の流れ

2025［令和7年］

5月〜9月

協力市町村（地域）を公募

応募書類を提出ください。
10月末までに採択結果を通知します。

11月以降

高校生が取材する「名人」を推薦

地域の「名人」※原則6〜8名をご推薦ください。

※推薦いただく「名人」は、林業、水産業、工芸など、森・川・海など地域の自然とかかわる仕事に長年従事し、先人からの知恵や技、心を受け継いできた概ね 60 歳以上の方を想定しています。
※推薦名人の人数はご相談いただけます。

［　これまでの協力地域　］

「聞き書き甲子園」の開催は、各市町村の農林水産課をはじめ、企画課、地域振興課等にご協力をいただいています。また、地域団体と連携し、ご協力いただいた地域もあります。

※第19回開催は、新型コロナウィルス感染症の拡大に伴い、中止しました。

協力市町村（地域）の声

「聞き書き」は、それぞれの作品ができる以上の成果がありました。高校生の純粋でまっすぐな質問は名人の心の奥に届きます。名人は深く自らの心の中にもぐり、答えを探します。名人は、「聞き書き」を通じて人生の棚卸をしているようでした。生きてきた道を振り返る名人の顔はとても穏やかです。そのような名人の姿を見ることで、高校生もまた自分の人生を深く考えるきっかけとなりました。参加したことが進路を決めるきっかけとなった高校生もいました。

（新潟県柏崎市市民活動支援課・特定非営利活動法人 aisa）

2026［令和8年］

5月 中旬 推薦いただいた「名人」の人数に応じて全国の高校生を募集

高校生の募集とあわせて、協力市町村（地域）決定のプレスリリースを行います。

8月 中旬 研修会への参加

参加高校生の研修会を開催します。各市町村（地域）担当者は、１泊２日でご参加ください。「聞き書き」する高校生と「名人」のマッチング等を行います。

8月 下旬 高校生による「聞き書き」取材のサポート

「名人」の取材は、原則として高校生が一人で行います。取材日は、事前にお知らせしますので、必要に応じてサポートをお願いいたします。

高校生の「聞き書き」と作品づくりの期間

12月 下旬 「聞き書き作品」の内容を確認

「作品集」を製作するにあたり、高校生が提出した作品内容をご確認いただきます。

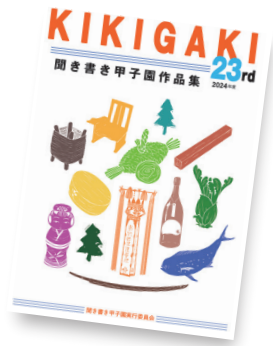
2027［令和9年］

3月 下旬 フォーラム（成果発表会）への参加

優秀作品には大臣賞等を授与します。参加高校生は、取材した地域ごとに発表を行います。当日は「名人」の代表者数名もご招待し、登壇いただきます。各市町村（地域）の皆さまも、当日、ご参加ください。

4月 下旬 「聞き書き作品集」を配布

参加した高校生のほか、関係機関等に「聞き書き作品集」を配布します。各市町村（地域）には、「名人」の人数分プラス 10 冊を贈呈させていただきます。また、作品データをお渡しいたしますので、広報等にご活用ください。



5月～12月 協力市町村（地域）による地域発表会の開催（任意）

市町村（地域）単位の地域発表会の開催をご検討ください。開催にかかる費用の一部は実行委員会が補助します。

都城市立図書館は、全国の聞き書き作品を収集していく方針の下、「聞き書きコーナー」をつくっています。図書館の運営理念は「ひとりひとりが《だいじなもの》をみつけていくために」としていますが、「聞き書き甲子園」はまさに名人たちの仕事や暮らしの中から《だいじなもの》をみつけていく機会になったのだろうと思います。高校生に連れられて名人ご夫妻も図書館にいらっしゃいました。ひとびともつなげていく素敵な取り組みです。

（宮崎県都城市生涯学習課・都城市立図書館）

「木のまち鹿沼」を支える「名人」の想いとともに、地域の歴史を伝えられる素晴らしい機会をいただきました。今回はオンライン※での取材となりましたが、高校生と共通の趣味で話が盛り上がり、終始笑い声が聞こえる楽しい聞き書きが行われ、参加して本当に良かったと感じています。「その生業は自分の一部」と話す名人のひとつひとつの言葉が、人生の岐路に立つ高校生の背中を押してくれました。彼らにも生きがいのような仕事が見つかることを願っています。

（鹿沼市経済部林政課）※コロナ禍のためオンラインで実施

「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環」は、平成25年に世界農業遺産に認定されました。この地域の営みを未来に伝える取り組みの一つとして、農林水産業に真摯に向き合う人々の姿を高校生に知ってほしいと考え、地元の高校生による「聞き書き」の活動を続けています。今回は全国の高校生が名人の知恵や技術のみならず、それぞれの想いをも受け止めてくれたに違いないと、彼らの今後に期待しています。

（大分県農林水産企画課　世界農業遺産推進班）

聞くことから、はじまる

「聞き書き」の基本は「聞く」というコミュニケーションです。

「聞き書き甲子園」に参加した高校生は、日本各地の名人を一人で訪ね、一対一でインタビューをします。
名人との対話はすべて録音します。そして、その録音を一言一句、書き起こします。
高校生はインタビューに費やしたエネルギーの何倍、何十倍もの手間と労力をかけて、再び名人と向き合うのです。
書き起こしが終わったら、不要な部分を削除し、整理します。そして名人の語り口を生かした、一人語りの作品に仕上げます。
出来上がった作品を読むと、まるで名人自身が、その半生を私たちに語りかけてくれているかのようです。

森、川、海、里、自然の鼓動に合わせ、延々と続いてきた暮らしの連続。
そこで培われた知恵を聞き、次の世代へ心を伝えていくことが「聞き書き」の意義です。
長年、働きつづけた人たちは、どのような思いを持ってきたのか。
地域の自然と、どのように向き合ってきたのか。
人と人は、なぜ、助けあい、支え合って生きてきたか。
生きるとは何か。働くとは何か。家族、仲間、そして地域とは何か。
高校生は、それらの事柄を通して、懸命に生きてきた人の息遣いを感じることができます。
そして名人の心に寄り添い、その生きてきた情景に、自身を重ねようとするのです。

ある高校生は言いました。
「名人の話は、いつの間にか、自分が言いたいこと（伝えたいこと）になった」

初めての土地を訪ね、その地で働きつづけてきた名人と出会い、「聞き書き」に取り組んだ高校生の作品をご覧ください。作品を読んでいただければ、きっと、その人に興味を持ち、その人が生きてきた風土を好きになります。

以下のページには、『第 18 回 聞き書き甲子園 聞き書き作品集』（令和 2 年 3 月発行）より、高校生の作品の抜粋と感想文を掲載します。

渡部和夫

漁業・69歳・山形県酒田市（飛島）

刺し網っていうのは、条件によって目の大きさが異なる。たとえば、トビウオ網だと目が細かい。メバルだとそれよりも大きい。タイとかカワハギだともっと大きくなる。だから網の数も100とか150ぐらい持っています。冬、時化（しけ）て海に出られないときは、いっつも作業場で網の修理をしています。仕事しないのは元旦の日だけ。魚って平らなところにはいなくて、海底が上がったり下がったりして隠れやすいところにいるんです。そういうところだと網が引っかかって、切れてしまう。でも、それを恐れてはならない。切れても切れてもまたやるっていう、ド根性みたいな気持ちがなきゃダメ。負けても負けても挑戦する。そうしないと成長できないんだから。

負けても負けても挑戦する。
そうしないと成長できないんだから。

何か変わりたい。そう思っていた私の目に留まったカラフルなポスター。それが聞き書き甲子園でした。参加しなければ一生経験しなかったであろう海の名人との対話。スマホの中で凝り固まっていた私の世界を大きく広げてくれたように感じました。「負けても負けても挑戦する。そうしないと成長できないんだから」という和夫さんの言葉は、何か行き詰ってしまうと諦めてしまう、私のやわやわな心に深く突き刺さりました。初めての場所で、初めて会う人と、初めての聞き書き。いろいろな初めてを経験して、人間として一回りも二回りも成長することができました。ありがとうございました。

尾形輝（宮城県 聖和学園高等学校２年）

「藁はお米の親だもの」って言ってね。藁から米が生まれる。藁がなきゃ米もできねえ。だから昔の人は藁がないと生きてかんねってくらい大事にしていた。無駄にしないでみんな使ったの。草鞋も、深靴も、運ぶときに必要な蓑もそうだし。「藁くず」も捨てないで、布団にしたの。昔の人は知恵と技でもって、みんなしてやってたんだ。

私らが最近になって藁細工するようになったのは「減反政策」が始まってから。生活の足しになるならって。わたしらはお正月のしめ縄専門だった。根気がいるし、力もいるし、夜なべして長いことやると手が荒れるけど、いい内職になった。藁の文化は絶やしたくないね。

私は自分と同県・同市の名人という稀にみるような取材をしたが、同市に住むからこそ、より深く学べたことや、逆に、まったくもって知らなかったことがあった。拙いこの作品で、名人の藁のように丈夫で一本の筋が通った人柄や生涯をまとめられたかは不安が残る。「現地に行って、柏崎の本当を知りたい」。この希望は良い経験に変わった。しかし、経験や感動だけで、この貴重な機会を終わらせるわけにはいかないと思った。「柏崎の本当を知ったうえで、柏崎にとって良いことを考え、行うこと」。それが最大限の恩返しであると感じた。まだ、柏崎の本当を知り尽くせていない。聞き書き甲子園は終わりじゃない。そう感じた。　**若月翔吾**（新潟県立長岡高等学校２年）

大橋チエ子

藁細工・75 歳・新潟県柏崎市

横山博志

弓づくり・58歳・宮崎県都城市

弓づくりの工程は、簡単にいうと100通りぐらいありますけど、細かくいうと200通りぐらいあります。だいたい1か月に30本の弓を作るので、1日にしたときは1日1張ですかね。1本の弓を最初から最後まで作るのではなく、20～30本の材料を持ってきて、同じ工程をいっぺんにやってしまいます。弓づくりを辞めたくなったときは、何度もありますね。大学卒業して帰ってきてから弓を作るにしても、初めて手掛ける仕事ですから。父が作っていたのも、見ていると簡単そうに見えるけど、簡単じゃない。やっていることはものすごく細かいから、実際にやってみると手が全然動かない。だから回数を重ねるしかなかったです。できるか、できないかは自分の努力次第です。今でもまだ、完璧な品物、100パーセントなものは作れていないと思うし、ずっと勉強ですね。うちの父もよく言ってました。「一生勉強だ」って。

「一生勉強」という横山さんの言葉に、弓づくりは人生そのものだと感じました。どんなに時間や手間がかかっても、自分の満足いくまで、工夫や努力を重ね、より品質の良い弓づくりを目指す。人生にたとえると「現状に満足せず、挑戦し続ける」ことだなと自分なりに思いました。取材を通して「聞く」ことの楽しさや奥深さに気づくことができました。「書く」ことは得意ではなかったけれども、「伝えたい！」と思うことをどう表現するかを考えながら書く作業は楽しかったです。都城大弓が10年後も、20年後も続いていくことを心から願っています。そして私も横山さんのように「一生勉強」の人生でありたいと思います。

松本恵満
（宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校5年）

矢内敏弘

製材・75歳・徳島県神山町

仕事は製材業です。木材を刻むんですよね。木は生きています。呼吸しているんです。色が変わったり、艶が出てきたり、いろんなことがある。寒帯や熱帯から来た木は、日本の気候には合いません。四季があるから。寒いところから来た木は夏の暑さに弱い。色がすぐに黒くなって艶がなくなるんです。しかし日本の木は、時とともに木に艶が出て、住人に馴染んできます。私のこだわりは、せっかく生まれてきた木だから、とことん世の中のために使ってあげる。普通だったら、2・3・4メートルというのが市場で売られている木材の規格なんよ。でも、私は、40・75・110センチの3つに取り分けるんです。1本10円、20円の小さなお金を大事にして、その木を大事にする。木に食べさせてもらっているんです。

木は生きています。呼吸しているんです。

僕は正直、林業の知識は皆無に近く、名人の話を理解して取材できるか不安でした。しかし、矢内さんご夫妻は優しく接してくださり、僕にもわかりやすく説明してくれました。矢内さんは、たくさんの苦労をされてきた方で一つ一つの言葉に重みを感じました。人を大事にされていることも伝わってきました。いつも謙虚で、木に対する情熱が感じられました。「木に生かされている」という言葉は、矢内さんの仕事への姿勢が表されていると感じ、提出した作品の題名にしました。このような貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

中川拓哉（徳島県 生光学園高等学校2年）

河田紀美江

林業・71歳 ・山口県下関市

私は最初から山の勉強をして嫁いだわけやない。だから、爺ちゃんの言うとおりにスギとヒノキばっかり植えてた。「なんで他の木は植えんのやろうか」って言ったら、「山のことなんにもわからんのやけ、お前は仕事だけすればいい」って言われた。それからいろいろ書物を読んだり、苗木を作ることも覚えた。そして誰よりも先にカヤの木を買ってきて植えようとしたわけよ。「カヤの木なら200年後に100万くらいにはなる。これから先の森づくりは2、3本売ったら1年の生活費があるような森づくりをするんよ」って言ったら、「お前はそんなことを考えちょったんか」「これから先はお前に山のことは任そう」って言うちゃった。最初は意見が通らんから苦労したこともあったね。苦労と喜びは表裏やけんね。

取材を進めていくうちに、私の不安と緊張はみるみる消えていった。優しく、わかりやすく取材に応えてくださった名人と、温かく迎えてくださったご家族のおかげだ。名人の林業に対する熱い想いを聞き、自然を愛する心を感じて、感動した。名人にお話を聞くということは、こんなにも心が動かされるものなのかと驚いた。また、「なんでもやれる、あんたも頑張り」という名人の言葉は、将来への大きな励みになった。私も名人のように努力を忘れず、仕事に誇りを持てる人間になろうと誓った。

里崎光（長崎県立平戸高等学校２年）

参加高校生の声

74歳のおじいちゃんが、こんなにもパワフルで、エネルギッシュで、
目が生き生きしているとは知らなかった。
一つのことに打ち込む姿は、見ていて惚れぼれした。
（宮崎第一高等学校２年　廣兼綾香）

名人の話を聞く中で、日本の森の「悲鳴」が
肌を伝わるように感じました。
（石川県立金沢伏見高等学校２年　脊戸大樹）

技術は技術だけで伝わっていくのではないと思います。
必ずその裏には、先人たちの想いや英知がこめられています。
（鳥取県立倉吉総合産業高等学校２年　高見亮摩）

地方創生について、本では理解していたのですが、
そこにどんな人がいて、地方がどう動いているのかを
考えたことがありませんでした。名人の想い、地域への愛。
結局、カタチではなく、人なんだと気づくことができました。
（大阪星光学院高等学校２年　大和弘明）

自分の目で見、耳で聞き、手で触れることを通してこそ
わかることを大切にしていきたい。
そうすることで、身の周りのあらゆるモノ、コトが
自分にとって“生きもん”に見えてくると思う。
（和光高等学校１年　片波見せるさ）

「聞き書き甲子園」は、以下の企業・団体等のご支援、ご協力により開催しています。

［募金・企業寄付］株式会社ファミリーマート　［協賛・協力］公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会、富士フイルムホールディングス株式会社、京王電鉄株式会社、株式会社ティムコ、公益財団法人SOMPO環境財団、株式会社ベネッセコーポレーション　［後援］総務省、全国知事会、全国市長会、全国町村会、全国山村振興連盟、一般社団法人全国過疎地域連盟、NPO法人「日本で最も美しい村」連合

ファミリーマートは「夢の掛け橋募金」を通じて、この活動を応援しています。

あなたと、コンビに、
FamilyMart